

■ JBC スプリント (JpnI) アラカルト (過去全 16 回の分析)

※第 2 回 (平成 14 年)、第 14 回 (平成 26 年) は盛岡ダ 1,200m、第 3 回 (平成 15 年) は大井ダ 1,190m、第 5 回 (平成 17 年)、第 9 回 (平成 21 年) は名古屋ダ 1,400m、第 6 回 (平成 18 年) は川崎ダ 1,600m、第 8 回 (平成 20 年) は園田ダ 1,400m、第 10 回 (平成 22 年) は船橋ダ 1,000m、第 12 回 (平成 24 年)、第 16 回 (平成 28 年) は川崎ダ 1,400m、第 13 回 (平成 25 年) は金沢ダ 1,400m で実施

※第 6 回 (平成 18 年) は「JBC マイル」の名称で実施

※記録は平成 29 年 10 月 10 日時点

■ 1 番人気馬の勝率や連対率はかなり優秀

単勝 1 番人気馬は 9 勝、2 着 3 回、3 着 0 回で、勝率が 56.3%、連対率および 3 着内率は 75.0% だった。一方、単勝 2 番人気馬は 3 勝、2 着 5 回、3 着 1 回、単勝 3 番人気馬は 3 勝、2 着 4 回、3 着 2 回で、3 着内率はともに 56.3% となっている。3 着馬は 16 頭中 13 頭が単勝 4 番人気以下だったものの、1 着馬と 2 着馬の大半を単勝 1~3 番人気馬が占めているレースだ。

■ 上位人気馬が 1~3 着を占めた例は 3 回

過去 16 回のうち 15 回は、単勝 3 番人気以内の馬が勝利を取めた。なお、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツーフイニッシュ決着は 11 回あるが、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツースリーフィニッシュ決着は第 15 回の 1 回のみである。

■ GI・JpnI 初勝利だった馬は 12 頭

過去 16 回のうち 12 回は、GI・JpnI において 1 着となった経験のない馬が優勝を果たしている。すでに GI・JpnI で 1 着となった経験があった優勝馬は、第 6 回のブルーコンコルド、第 9 回、第 11 回のスーニ、第 13 回のエスポワールシチーだけだ。

■ 半数の 8 回で 5 歳の馬が優勝

馬齢別の勝利数を見ると、3 歳が 1 勝、4 歳が 2 勝、5 歳が 8 勝、6 歳が 2 勝、7 歳が 2 勝、8 歳 1 勝となっている。第 12 回のタイセイレジェンドが最後の優勝例ではあるものの、いまだに 5 歳馬の勝利数が突出して多い。

■ 優勝馬の大半は JRA 所属馬

所属別の勝利数を見ると、JRA が 15 勝、地方が 1 勝となっている。地方所属で優勝を果たしたのは第 7 回のフジノウェーブ（大井）だけだ。

■ 牝馬は 1 勝、外国産馬は 5 勝

牝馬の優勝例は第 15 回のコーリンベリーのみである。一方、外国産馬は第 1 回のノボジャック、第 3 回のサウスヴィグラス、第 9 回、第 11 回のスーニ、第 16 回のダノンレジェンドと、計 5 回の優勝例があった。

■ “連覇”を達成したのはブルーコンコルドだけ

2 回連続で優勝を果たしたのは、現在のところ第 5 回ならびに第 6 回のブルーコンコルドのみだ。なお、他には第 9 回と第 11 回を制したスーニが複数回の優勝を果たしている。

■ 騎手別の歴代最多勝記録は「2」

騎手別の勝利数を見ると、2 勝の川田将雅騎手、幸英明騎手がトップタイとなっている。なお、地方所属騎手で優勝を果たしたのは、第 7 回の御神本訓史騎手（大井）のみだ。

■ 調教師別の歴代最多勝記録も「2」

調教師別の勝利数を見ると、2 勝の安達昭夫調教師、服部利之調教師、吉田直弘調教師がトップタイとなっている。ちなみに、このうち異なる 2 頭で 2 勝をマークしたのは、第 8 回をバンブーエールで、第 13 回をエスポワールシチーで制した安達昭夫調教師だけだった。なお、地方所属調教師で優勝を果たしたのは、第 7 回の高橋三郎調教師（大井）のみだ。

■ 4 枠と 6 枠が好成績も 5 枠は優勝例なし

枠番別の勝利数を見ると、4 勝の 4 枠と 6 枠がトップタイ。3 勝の 3 枠が単独 3 位となっていた。ちなみに、未勝利の枠番は 2 枠と 5 枠だけである。また、馬番別の勝利数を見ると、3 勝の 6 番と 12 番がトップタイ、2 勝の 4 番と 8 番が 3 位タイ。未勝利の馬番は 7 番、9 番、10 番、13 番、14 番、16 番だ。